Gauḍīya Vaiṣṇava の Bhaktirasa (2)

頓　宮　　勝

Gauḍīya Vaiṣṇava〔G. Vai.〕の思想の根本が，神と人間の関係を Acintyabhedābheda と見るところにあると前回のべたが，これは Kṛṣṇa (=Śaktimat) と Rādhā (=Śakkti) との関係をその様に見るところから付随的に導き出されたものなのである[1]。すなわち G. Vai. は，先ず本来一つである Paramatattva が，Bhagavat, Paramātman, 及び Brahman の三つの姿をとる，と Bhāgavata Purāṇa 1-2-11 を引用してのべた後，あらゆる属性を備えて完全な形をして現われた場合が Bhagavat であり，いかなる属性も備えず，不完全な形として現われた場合に Brahman であると主張する[2]。同様に Bhagavat と Paramātman との間にも本質的相違は見られない。後者は創造の原因として Bhagavat 自身の部分である Jīva に入り，体や Pradhāna を活気づけ，内なる規定者としてそれらをそれぞれの役割りに駆りたてる，と言われている[3]。

次に，Paramatattva である神の属性の中で最も重要なのが Śakti であり，Svarūpaśakti〔SvŚ〕, Jīvaśakti,〔JŚ〕Māyāśakti〔MŚ〕の三つに分類され，SvŚ は Bhagavat に，残る二つは Paramātman に配属される。

さて，本来一つである Paramatattva が，Bhagavat, 及び Brahman と二通りに呼ばれているが，両者の間に本質的相違があるのではなく (Abheda)，現われ方に相違があるのであつて (Bheda)，またその相違は単なる名称からくるのではないのである。Jñāna によるか Bhakti によるかで信者の認識に段階があり，それによつて一つの Tattva が二様に見られるのである[4]。そして Bhagavat が Brahman より卓れているのは，至福の具現である前者には，Paramatattva 固有の SvŚ の完全な現われがあるからである。従つて Paramatattva の未分化の局面を現わしているに過ぎない Brahman を見ることは不完全であり，Paramattva の本質を形成している種々の限定要素 (Viśeṣa) が現われている Bhagavat を見ることは完全なのである。そしてそれは Bhakti によつてのみ可能とされる[5]。

この様に Bhagavat, Paramātman, Brahman の関係が Acintyabheda であると同様に，Śakti と Śaktimat の両者も分離できない関係により同一なのであるが[6]，神は MŚ の影響は受けないのである。なぜなら MŚ も JŚ も創造前には神の中

に内包されており，神の意志によりはじめてそれらは創造にとりかかることができるからである。そして創造にあたつては，神は自らの本質を変形させることなく，Acintyaśakti によつて世界創造を行うのであり[7]，従つて神と同質でありしかも異なる Śakti の変形が世界であり，神の本質の変形ではないのである[8]。こうして Śakti と Śaktimat，或いは Śakti の変形である世界との関係は Bhedābheda であり，それは人間の力では計り知れない (Acintya) のである。

G. Vai. は相矛盾する SvŚ と MŚ をそれぞれ Bhagavavat と Paramātman に配置し，二者の間の関係，さらに Śakti と Śaktimat との関係を Acintyabhedābheda と見て，MŚ. の影響を神は受けないと言う。しかし，それでは何故この様な複雑な関係により，自ら満足し，永遠の至福を味わうとされる神が，この世に現われ Rādhā をはじめとする取り巻きと戯れ，また世界を創造するのか？ G. Vai. はここでその宗教的性格をより明確にし，信者を喜ばせる為に[9]，と答え，Bhakti という概念を持ち出すのである。神の最高の本質である SvŚ の本質は Hlādinī という機能であり，その Hlādinī の本質であり特別な機能が，愛 (Rati) と呼ばれる Bhakti なのである[10]。そしてこの Bhakti は本性として Jīva にも備わつており，普段は MŚ によつておおわれているが，神の慈悲により現われ，Jīva は神との同質性を回復するのである。Jīva はこうして神と一体になるのであるが，Jīva=Sevaka, 神=Sevya という関係は永久に続くのである。

かくして G. Vai. では，Paramatattva は三つの様相で把握され，その中でも無数の完全な Śakti を備えている Bhagavat が神の真実の姿と考えられている[11]。

Paramatattva としてこの様に確立された Bhagavat-Kṛṣṇa は，様々な場所に様々な姿をとつて現われるのであるが，彼の美しく甘い愛 (Mādhurya) が完全な，永遠なる青春期にある，Vṛndāvana における Kṛṣṇa が最高の現われなのである。そして Vṛndāvana で Kṛṣṇa は彼の信者 (Bhakta)[12]である牛飼や牛餌の女達 (Gopa-Gopī) と戯れる (Līlā) のであるが，それら Bhakta の中でも最高のものが，Rādhā で，Kṛṣṇa (Śaktimat) の無数の力 (Śakti) のうちでも本来的で最高の SvŚ の Hlādinīśakti の現われなのである。

この様にして G. Vai. は抽象的な Acintyabhedābheda の関係にある Śakti と Śaktimat の関係を具体的な Kṛṣṇa-Rādhā の関係として把握し，Rādhā と一体になつた Kṛṣṇa が最高の Paramatattva であると言うのである。そしてこの本来一つである Paramatattva が二つに分かれるのは，Kṛṣṇa が先づ自分自身の為に LīLā の際に生じる Rasa を味わい，次に信者である Rādha 等の Nityaparikara

にそれを味わわせる為なのである。そしてこの両者の間に横たわり，味わわれるのが Bhakti なのである。この Bhakti-rasa は本来 Kṛṣṇa-Rādhā の間にある関係なのであるが，G. Vai. はさらに Kṛṣṇa，又は永遠なる Kṛṣṇabhakta 対現世の Bhakta という間にもそれを布えんしていくのである。

さて，G. Vai. における Bhakti の詳細な考察の代表的な作品は Rūpa Gosvāmin〔RG〕の Bhaktirasāmṛtasindhu〔BRAS〕と，Jīva Gosvāmin〔JG〕の Bhaktisandarbha〔BhS〕である。従つて以下では主としてこの二つの作品を基に，G. Vai. における Bhakti を考察する。

G. Vai. は Jñāna や Karman 等を完全に否定するのではなく，それらを Bhakti に従属するものと見なし，Bhakti が一番卓れていると主張する[13]。特に Jñāna と比較して，Bhakti の卓越性を強調するのである[14]。そして Bhakti は五番目の Puruṣārtha であり，他の四つの Puruṣārtha はその前では草の様につまらないものであるとされる[15]。この Bhakti は前述したように，Kṛṣṇa の SvŚ の一つである Hlādinīśakti の特別な機能であるから，Śakti と Śaktimat の関係に従い，Kṛṣṇa と Nityaparikara の両者に存在するのである[16]。

Jīva における Bhakti は神の慈悲により生じるのであるが，神自身直接信者に慈悲をかけるのではなく，正しい Vaiṣṇava 等を通じてかけるのである[17]。彼等正しい Vaiṣṇava (Jīva や Nityaparikara とは異なる信者) は，Jñāna の道に従い Brahman を経験した人々と，Bhakti の道に従い神の愛を得た人々の二種類がある[18]。そして彼等正しい Vaiṣṇava がいかなる形で神を体験したかで，Jīva のいかなる形で神を体験するのが決まるのである。

正しい Vaiṣṇava との接触で，Jīva には先づ崇拝の対象に対する好み (Ruci) が生じ，次に Bhakti への第一段階である信仰 (Śraddhā) が生まれる。さらに Jīva は崇拝 (Upāsanā) の段階に移行するのであるが，その Guru が Jñānisiddha か Bhaktasiddha かにより，属性を備えていない Brahman の崇拝か，属性を備えた Bhagavat-Kṛṣṇa の崇拝をするかが決まるのである。そして後者が Bhakti-rūpa-upāsanā と呼ばれる一般の Bhakti であり，三つに分類される。そしてさらなる分析の結果得られる Niṣkāma Svarūpasiddhabhakti が，BRAS において定義される[19]，Sāmānyabhakti と区別された最高の Bhakti を指すのである。

この最高の Bhakti は，Sādhana-bh.[akti], Bhāva-bh., Prema-bh. の三種に分類される[20]。そして Sādhana-bh. には Vaidhī と Rāgānugā の二種があり[21]，前者は Śāstra の規定に従つて生じると言われる[22]。さらに RG は Vaidhī を 11

に分類し，JG は 64 に分類しているが，ここではその詳細には触れない。

一方，現象世界にあり，JŚ の現われである一般の Jīva が，Vraja に住む人々や牛等の様に，直接 Kṛṣṇa に Bhakti を持つて仕えることは不可能であるから，Jīva にとつては彼等の Rāgātmikā-bh. をまねることによつてのみ Kṛṣṇa に接することができると言われ，それが Rāgānugā-bh. と呼ばれるのである[23]。

Rāgānugā-bh. の手本になる Rāgātmikā-bh. は，「Rāga とは，望むもの (Kṛṣṇa) に対して自然に生じる一心不乱の状態であり，これを本質とするものが Rāgātmīkā である[24]。」と言われ，後述する Prema-bh. であり，G. Vai. において全ての Bhakti の中で最高の位置を占めるものなのである。

Bhāva-bh. は，Prema-bh. が Kṛṣṇa の Hlādinīśakti のみの現われであるのに対して，Saṃvitśakti と混りあつた Hlādinīśakti の現われで，Prema-bh. への曙光であると言われる[25]。この Bhāva は Ratiとも呼ばれ，時には Jñāna や Yoga によつて解脱を求める人々にもそれが認められる場合もあるが，それは「見せかけ」(Ābhāsa) であると言われる。しかし，RG はこのRatyābhāsa も時には真の Rati に成り得ると論じ，G. Vai. 以前の哲学諸派，特に Advaita Vedāntin との摩擦を避けている。一方当時の Advaita Vedāntinの中にも自派の立場を守りながら，Bhakti 学派との融和を計ろうとする者もあつたと言われる[26]。

さて，この Bhāva-bh. が濃厚になり，心を完全に滑らかにし，Kṛṣṇa を，子供，友人，愛人として自分のものだと思う気持が非常に強くなつた時，Prema-bh. と言われる[27]。そして，Bhāva-bh. が Sādhana-bh. からも生じ得ることから，Prema-bh. も Vaidhī 或いは Rāgānugā から生じるものと，Kṛṣṇa の恩恵から生じるものの二種類があるとされる[28]。さらに後者は，神が偉大であるという知識 (Māhātmyajñāna) に基づくものと，[神は甘く優美 (Mādhurya) であるという知識のみに基づく[29]] 純粋 (Kevala) なものとの二種類に分けられるのである。そしてこの神の恩恵によるものは，本来Nitya-parikara に見られるものなのであるが，Vaidhī の道をとつた者には前者が，Rāgānugā の道をとつた者には後者が一般に見られると言われている[30]。

こうして，G. Vai. は Kṛṣṇa への Bhakti を唯一つの Bhakti と考えるのであるが，他学派との融和を計るため他の神々への Bhakti を否定はしないのである。RG が Bhakti を先づ Uttamā と Sāmānyā に分けたのが，その現われの一つである。従つて Bhāvā-bh. を述べる際にはじめて SvŚ への言及がなされるのである。Sāmānyā においても Bhakti であるからには SvŚ の現われがあるはずであ

るが，G. Vai. がそれに触れていないのは，不完全な形で現われると暗に示しているものと思われる。すなわち G. Vai. の見解では，他の神々は Kṛṣṇa の Avatāra にすぎず，SvŚ の完全な戯れは，Kṛṣṇa においてのみ可能であるとされるからである。

この様に G. Vai. で考えられる Bhakti は Sādhana→Bhāva→Preman と進み，その Bhakti は Jīva に本来備わつているもので，ある刺激（教え，まれには Prasāda）によつて現われ（Abhivyakta），Jīva は愛という喜びを味わう（Rasa）とされる。そしてこのことをさらに具体的に示すために，従来の Rasa 理論が利用されるのであるが，この Bhakti の考察ですでにうかがい知れる G. Vai. への密教の影響が，Bhaktirasa の考察でより明確に現われてくるのである。すなわち，古代ベンガル語で書かれたと言われる Caryāgīti にはじまり，Vaiṣṇava 等の Sahaja を通じ，Jayadeva. Vidyāpati, Baḍu Caṇḍidāsa 等を経て，15 世紀後半から 16 世紀へかけての G. Vai. の動きに至るまでの，思想的・言語的動向に，ある種の共通項がうかがえるのであるが，その考察は別稿を期すことにする。

略 号

BhS Bhaktisandarbha, ed. Rādhāramaṇ Gosvāmī. Bengali character (Cal. 1962)
BhgS Bhagavadsandarbha, Jadavpur Univ. Skt. Series (Cal. 1972)
CCA Caitanyacaritāmrta, ed. R. Nath (Cal. 1963)
PS Paramātmasandarbha, Jadavpur Univ Skt: Series (cal. 1972)
VFM Vaiṣṇava Faith and Movement, S. K. De (Cal. 1961)

1) rādhā pūrṇa śakti kṛṣṇa pūrṇa saktimān | dui vastu bheda nāhi śāstraparamān || ..... | lilāras āsvādite dhare duí rūp || CCA 1-4-83, 85.
2) vaiśiṣṭye prāpte pūrṇāvirbhāvatvenākhandatattvarūpo'sau bhagavān | brahma tu sphuṭam aprakaṭitavaiśiṣṭākāratvena tasyaiva samyag āvirbhāva iti | BhgS p. 2.
3) yena hetukartrā ātmāṃśabhūtajīvapraveśanadvārā saṃjīvitāni santi dehādīn tadupalakṣaṇāni pradhānādisarvāny eva tattvāni, yenaiva preritayaiva caranti svasvakārye pravartante tat paramāmararūpaṃ viddhi | ibid., p. 7.
4) svasvadarśanayogyatābhedena dvidho'dhikāri dvidhādṛṣṭam | ibid., p. 114.
5) bhaktir eva samyagdarśane hetuḥ | ibid., p. 116.
6) śakteḥ śaktimadvyatirekād ananyatvam uktam | PS p. 44.
7) tatrāpariṇamatasyaiva svato'cintyaśaktyā pariṇāmaḥ | ibiP., p. 41.
8) śaktirūpeṇa pariṇamate na tu svarūpeṇeti gamyate | ibid., p. 44.
9) taṭasthān anyāmś ca bhaktān ānandayitum svarūpaśaktyāviṣkāreṇaiva nānāvatārān lilāś cāsau prakāśayati | ibid., p. 67.
10) paramasārabhūtāyā api svarūpasakteḥ sārabhūtā hlādinī nāma yā vṛttis tasyā

eva sārabhūto vṛttiviśeṣo bhaktiḥ sā ca ratyaparaparyāyā | ibid., p. 68.

11) Kṛṣṇa=Bhagavat の証明は KS に詳しい。cf. VFM. pp. 314～354.

12) Bhakta は CCA では二種類に，BRAS では四種類に分けられているが，筆者は特に区別する必要のない限り，「信者」と訳す。

13) .....ity ādinā ca karmeṇa sadyomuktikramamuktyupāyau jñānayogau uktvā tato'pi śreṣṭhatvaṃ bhaktiyogahetubhagavadarpitakarmaṇa evoktvā sākṣād bhaktiyogasya kaimutyam evānītam | BhS. p. 38.

14) brahmānanda bhaved eṣa cet parārddhaguṇīkṛtaḥ | naiti bhaktisukhāmbhodheḥ paramaṇutulām api || BRAS 1-1-21, cf. CCA. 2-8-556.

15) kṛṣṇaviṣayakapremā param puruṣārtha | yār age tṛṇatulya cāri puruṣārtha || pañcam puruṣārtha premānandāmṛtasindhu | brahmānandādi ānanda yār nai ekbindu || CCA 1-7-81～2.

16) bhaktir bhagavati bhakteṣu ca nikṣiptanijaubhayakoṭiḥ tiṣṭhati | PS p. 68.

17) yā kṛpā tasya satsu vartate sā satsaṅgavāhanaiva vā satkṛpāvāhanaiva satī jīvāntare saṃkramate na svātantrā | BhS p. 301.

18) atra jñānamārge brahmānbhavino mahānto bhaktimārge labdhabhagavatpremāṇo mahānto iti lakṣaṇasāmānyam iti jñeyam | ibid., 308.

19) anyābhilāṣitāśūnyam jñānakarmādyanāvṛtam | ānukūlyena kṛṣṇānuśīlanaṃ bhaktir uttamā || BRAS 1-1-11.

20) sā bhaktiḥ sādhanam bhāvaḥ premā ceti tridhoditā || BRAS 1-2-1.

21) vaidhī rāgānugā ceti sā tridhā sādhanābhidhā | BRAS 1-2-5

22) śāsanenaiva śāstrasya sā vaidhī bhaktir ucyate || BRAS 1-2-6b.

23) virājantīm abhivyaktaṃ vrajavāsijanādiṣu | rāgātmikām anusṛtā yā sā rāgānugocyate || BRAS 1-2-270.

24) iṣṭe svārasikī rāgaḥ paramāviṣṭatā bhavet | tanmayi yā bhaved bhaktiḥ sātra rāgātmikodītā || BRAS 1-2-272.

25) premnaḥ prathamacchavirūpaḥ | JG'S commentary on BRAS.

26) 彼等の中でも有名なのが，"Bhakti-rasāyana" の作者でもある Madhusūdana Sarasvati であると言われている。cf. "Bhakti-rasāyana," Bhūmikā, pp. 1～3.

27) samyaṅmasṛṇitasvānto mamatvātiśayāṅkitaḥ | bhāvaḥ sa eva sāndrātmā buddhaiḥ premā nigadyate || BRAS 1-4-1.

28) bhāvotthā'tiprasādotthaḥ śrīharer iti sa dvidhā | B. R. A. S. 1-4-4.

29) kevalo mādhuryamātrajñānayukta ity arthaḥ | JG's comm. on BRAS

30) māhātmyajñānayuktaś ca kevalaś ceti sa dvidhā | BRAS 1-4-11, harer atiprasādo'yaṃ saṅgadānādir ātmanaḥ || ibid., 1-4-9, mahimajñānayuktaḥ syād vidhimārgānusāriṇām | rāgānugāśritānāṃ tu prāyaśaḥ kevalo bhavet || ibid., 1-4-14.

(京都大学大学院)